

実践報告

基礎看護技術演習における体験を取り入れた 演習前課題の意義

増田富美子

兵庫医療大学看護学部

Meaning of Pre-learning Tasks Adopting Nursing Students' Experiences for The Fundamental Nursing Care I

Tomiko MASUDA

School of Nursing, Hyogo University of Health Sciences

抄 録

これまで担当した基礎看護技術科目では「体験する」→「気づく」→「考える」の思考プロセスに基づく、体験を取り入れた演習前課題を实践し、平成29年度兵庫医療大学全学FD/SDワークショップで教育実践報告の機会を得た。看護学部第1学年後期履修の基礎看護技術I（生活援助）の「食生活への援助」で実践している体験を取り入れた演習前課題を振り返り、その意義と今後の課題を考える。

キーワード：基礎看護技術教育、自己学習課題、体験

I はじめに

本学の看護学部の看護専門科目の履修は1年前期から開始する。前期に看護とは・看護学とは何かを理解するための看護学概論Iと看護の基盤となる看護技術の基本的な考え方、看護実践において基盤をなす知識・技術・態度について講義、演習を通して学習する基礎看護方法論を履修する。そして、8月に行われる基礎看護学実習Iを経て、後期に基礎看護技術I（生活援助）を履修し、看護本来の役割である生活を支えるために必要な日常生活援助技術の習得を目指す。

大学に入学して半年の10代後半の学生に専門的知識に加え、技術・態度を要求される日常生活援助技術の理解と習得は容易なことではない。担当する単元に

おいて、学生の興味を引き出すにはどんな仕掛けが必要か、学生の理解はどのようなことで可能になるかなど試行錯誤しながらこれまで取り組んできた。また、看護の対象となる人々への日常生活援助は決して特別なものではなく、学生自身が日々営んでいる生活が基盤となっていることへの気づきを大切にしたいと考えてきた。そこで考えに至ったのが、基礎看護技術演習における体験を取り入れた演習前課題である。

今回は担当した看護学部第1学年次後期の基礎看護技術I（生活援助）の単元「食生活への援助」での実践例を紹介し、その意義と課題について報告する。

Ⅱ 単元「食生活への援助」の講義・演習の流れ

基礎看護技術の各単元は講義・演習によって構成される。講義では、看護技術に必要な基礎知識や理論的基盤を学習する。教員のデモンストレーションの後、演習前に看護技術を自己練習し、演習に臨むという流れが一般的である。

図1に単元「食生活への援助」の講義・演習の流れを示す。本単元は講義1コマ、演習1.5コマで構成され、習得する看護技術は食生活への援助技術である。他の単元とは異なり、演習前に教員によるデモンストレーションは行わず、食事を摂取するために必要な機能の一部が使えない2設定（視力障害がある状況と頭側挙上30°の体位制限がある状況）について学生が共同で援助計画を考え、演習で実施する形式で行う。演習前に教員によるデモンストレーションを行わない理由は、食生活の援助では、食事環境や食事姿勢を整えるための基本となる環境調整技術や体位変換・姿勢保持の技術は前期で学習しており、それらの既習の技術を食事の場面に適応させることが課題となること、また、反復練習により「型」を習得していく技術が少ないことが挙げられる。そして、本単元の位置づけとして、自力で食べることに働きかける看護援助に重点を置くこと、食生活の援助の要点は対象者の安全・安楽・自立と食事をしたという満足のために看護者の創意工夫が重要であることを柱に教授しており、学生自身の生活体験や既習学習、そして、本単元講義をもとに学生の創意工夫を引き出すことをねらいとしているからである。

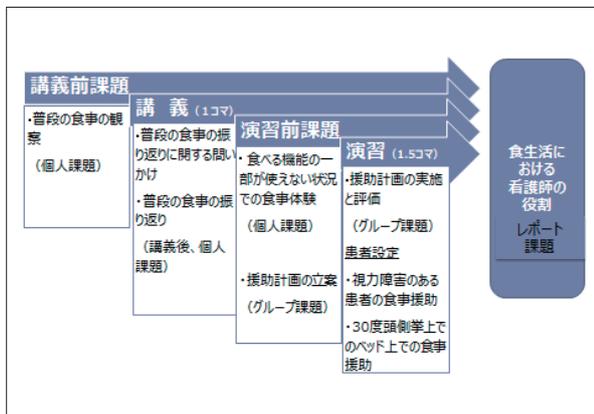


図1 単元「食生活への援助」の講義・演習の流れ

Ⅲ 単元「食生活への援助」の演習前課題

演習で実施する援助計画立案に向け、「体験する」→「気づく」→「考える」の思考プロセスに基づき、演習に向けて2課題を提示する（図2）。

1. 課題① 普段の自分の食事について観察する

課題①は新たに体験するというより、学生が自身の食生活について振り返り、自分にとってや人にとっての食事の意義や意味を理解することを目的とした課題である。図3の課題用紙を配布し、学生は講義までに実施する。課題は、食事に対して大切にしていることやこだわりについて記述した上で、普段の食事について1)～7)を記述する。また、食事内容がわかり、上半身（正面）が入った画像と全身（側面）が入った画像を貼付する。この課題が講義前課題であることから、4)の食事摂取（食事摂取の場所、食事に必要な身体機能、使用した物品など）の着目する視点の手掛かりとなるよう、課題提示と同時に講義資料を配布している。

講義後の課題として、講義前に実施した食事の観察について、食事の意義、食事の基本原則などから気づいたこと、考えたことを記述する。

2. 課題② 食べる機能のうち1つができない状況で食事摂取をして、普段の食事との違いを記述する

課題②は、設定した状況を体験することで、演習で実施する援助計画を考える手掛かりとなることを目的とした課題である。図4の課題用紙を配布し、学生は演習までに実施する。学生は、「目隠しをして食べる」、「側臥位で食べる」、「非利き手のみで食べる」、の3設

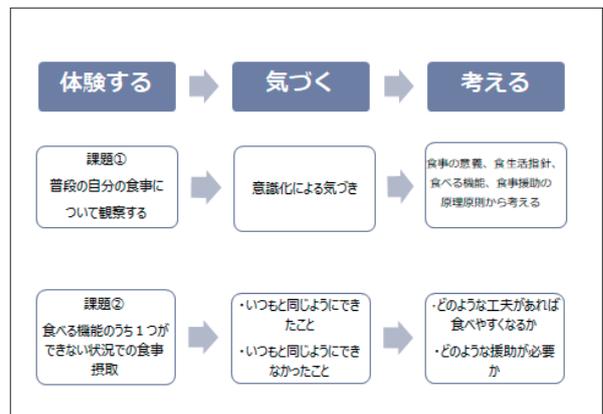


図2 単元「食生活への援助」の演習前課題

定を実施する。各設定に対し、食欲や食後の満足感、食べたもの・量・所要時間、いつもと同じようにできたこと、いつもと同じようにできなかったことを記述し、どのような工夫があれば食べやすくなるか、どのような援助が必要かについて体験から考えたことを記述する。課題の実施に際しては、安全な課題遂行のために自分と周囲の安全について十分に配慮し、周囲の人の理解と助けを求めること、おもしろおかしい体験で終わってしまわないよう演習の設定患者の援助計画につながる課題であることを課題用紙に記載し、講義内でも強調している。

Ⅳ 学生の反応

1. 課題① 普段の自分の食事について観察する

記述内容の1例を紹介する。学生は普段の食事を通して、「下宿をしてはじめてバランスのいい食事をとることが難しいということを感じた」、「食べる機能には脳機能や口腔機能など様々な機能が働いている」ことに気づき、「対象者にあった形状のものや、栄養

量、嗜好など看護師の知識と工夫がいい看護を提供できる」という考えに至っていた。

この課題では、「いつも栄養バランスを考えて食事を作ってくれる母に感謝したい」と振り返りに記載されていたり、「●●家特製●●」と献立の説明がなされていたり、食事の前には「手を洗う」、「テーブルを拭く」、食後には「食洗器に入れる」、「食べた食器を洗う」、「テーブルを拭く」など、学生の生活に触れられる。案外きちんと食事の準備や後片付けをしていることにこちらが気づかされ、援助計画に期待がかかる。

2. 課題② 食べる機能のうち1つができない状況で食事摂取をして、いつもの食事との違いを記述する

学生の記述内容の1例を紹介する。目隠しをして食べることで、いつもと同じようにできたこととして「ポトフはお皿を持って、匂いと温かさを感じることができた」、「いつも通りの姿勢で食べることはできた」があり、いつもと同じようにできなかったこととして「具材を選ぶことができなかった」、「三角食べを心がけていたが、お皿を置くのが嫌になって、ばっかり食べる

基礎看護技術Ⅰ 食生活への援助 講義前課題②

学籍番号 _____ 氏名 _____

12月6日の講義までに実施、講義に持参
食事内容がわかり、上半身(正面)が入った画像と全身(側面)が入った画像を貼り、文章と画像で説明しましょう。

月 日 () の () 食 開始時刻 _____ 終了時刻 _____ 所要時間 _____

1) 献立(料理名、食材、味、調理方法、量・個数、だれが献立を決めたかなど)
2) 配膳されるまで(食材の調達、調理、配膳はいつ、だれがどのように行ったかなど)
3) 食事前のあなたの状況(食欲、空腹感の有無と程度、体調、心理状態など)と食事前の準備としてあなたがしたこと
4) 食事摂取(場所、食事スペースの状況、食事に用いた物品、食事姿勢、かみ締め・飲み込み、上肢の使い方、一緒に食べた人など講義資料参照)
5) 食後のあなたの状況と食後の片付けなどあなたがしたこと
6) 食事摂取量
7) 満足度合い

2. いつもの食事について、食事の意義、食事の基本原則などから気づいたこと、感じたこと、考えたことについて記述しましょう。12月6日講義後記載

提出2017.12.8 1限開始前 M201

図3 課題①の課題用紙

基礎看護技術Ⅰ 食生活 講義後課題

学籍番号 _____ 氏名 _____

食べる機能のうち1つができない状況で食事摂取をして、いつもの違いを記述しましょう。
・それぞれの状況で1食を摂取してください(1食のうち、3設定を体験するものではありません)。
・基礎看護学実習室以外で実施してください。
※自分と周囲の安全について十分に配慮し、課題の必要性について説明し、周囲の人の理解と助けを求めましょう。

	目隠しをして食べる	側臥位で食べる	非利き手の片手のみで食べる
食欲			
食べたもの量			
所要時間			
いつもと同じようにできたこと			
いつもと同じようにできなかったこと			
援助が必要と考えたこと			

※設定患者の援助計画につながる課題です。いつもの食事と比較して、体験したことを丁寧に記述しましょう。

提出2017.12.22 演習後 実習室

図4 課題②の課題用紙

なってしまった」など、体験したことでの気づきが記載されていた。そして、「ずっと緊張状態が続くので、お皿を持つ、置く時には援助が必要だと感じた」と体験から援助に繋がる考えができていた。また、いつもと1つだけ異なる食事の状況において、食欲や食事量に変化し、食事時の視覚情報の重要さ、座位姿勢の保持、左右の上肢の役割等に気づくことができていた。

3. 援助計画への反映

グループで作成した援助計画には、援助する対象となる患者役の学生から普段の食生活に関する情報、例えば、食べるために必要な機能の状況（右利き、座位保持可能など）、食べ方（汁物から先に食べて、喉を潤す、温かいうちに食べるなど）、食べるスピード、好きな食べ物、苦手な食べ物などを得て、具体的に示されていた。

体験を活かした工夫点では、視力障害がある状況では、「汁物は熱くて怖いので、あらかじめ器を触ってもらい、温度確認をしてもらおう」、「体験をしてみて、普段より口に入れることに苦労をしたり、汁物が垂れてしまって服や周囲を汚してしまうことがわかったため、食事に不必要なものは片付け、胸元にタオルを巻く」などが留意点として記載されていた。また、演習での患者体験は各グループ1人ではあるが、援助後のグループディスカッションでは、患者体験をしていない学生から「私が目隠しして食べた時は…」と課題②の体験内容が活用できていた。

V 考察

学生が自身の普段の食生活を振り返ることの意味について考える。兄玉は「“その人”が自分の健康にプラスになるように生活行動するのを助けるのがナースの役割」¹⁾と述べている。そのために、看護基礎教育課程では生活行動を助けるための日常生活援助技術の習得を目指す。初学者に対し、食生活への援助を学ぶ意味を理解させ、学習を動機づけるための仕掛けとして、普段の食生活を振り返ることはどのような効果があったらうか。

川島は「普通の人の暮らしが大事であり、普通の人の気持ちがわかるということが「看護」の基礎だとすると、1年生は一番“普通の人”に近いわけなので、そのときの気持ちや思いを記憶させて大切に育てる必要がある」²⁾と述べている。普通の人が一番近い1年生にとって、日々の習慣化している日常生活行動はその

意義や意味を意識する機会は少ない。それゆえ、課題の問いに答えながら自身の食事の振り返り、その時に感じた思いや考えを記述することで、学生は自分にとっての、そして人にとっての食生活の意味や意義を理解できる。同時に看護は人の生活が基盤であることへの理解につながると考える。

次に課題②の食べる機能のうち1つが使えない状況での食事を体験する意味について考える。この課題に至った経緯として、これまでの援助計画では設定患者の状況の理解と状況が援助計画にあまり反映されていなかったことが挙げられる。演習の際に、「目を閉じて食べてみたことある？」の問いかけに、「やっていません。思いつきもしなかった。」のような学生からの反応がある。もちろん、目を閉じて食べた体験をしなくても、演習での体験を通じて学ぶことはできる。しかし、たった一度の食生活への援助の演習に向け、何か援助の手掛かりとなる仕掛けはないかと考えた。提出された課題②には、体験することでしか気づけないうりリアルな内容が記載されており、援助の視点で考えることができていた。そしてその体験が援助計画や振り返りにも活用されており、課題のねらいは達成できたと考える。水澤は「学習における体験の重要性は指摘し、学生自身が体験している日常生活を想起させながら、ケアにどう活かしていくか考えさせる必要がある」³⁾と体験の必要性を述べている。いつもの食事とそうでないときの食事の体験は、ケアにどう活かしていくかを考えるための教材となっていると考える。

また、佐藤は、「体験学習を取り入れるときには、体験学習をしたほうが教育的に価値があるかどうか、あるいは学生にとっての驚きや感動といった印象の深さや安全性などから検討する」⁴⁾と述べている。課題②の検討過程においては、個別課題であることから、設定の選択、起こりうる危険性について検討した。そして体験のインパクトにとどまらないよう、この課題を行う意味についての確認を行った。その結果、援助計画の立案時や援助終了後のグループ討議でも活用することができたと考える。

最後に、日常生活援助技術において体験できることには限りがあっても、体験を取り入れ、学生個人の気づきや考えを教員・学生間で共有し、技術習得という同じ目標を目指す土台をつくる役割もあると考える。

VI 今後の課題

学生は看護学を学び始めて1年も経っていないのに

もかかわらず、体験を通して援助の視点が気づけていることに学生の成長を感じる。今後の課題として、体験を取り入れた演習前課題が演習とどのように関連しているかを検証するとともに、体験をきっかけとし、自ら問いを立て、主体的に学ぶ力を伸ばすための方略について検討し、実践していきたいと考える。

引用文献

- 1) 児玉香津子.「生活行動を助ける」がすべての看護の基本. コミュニティケア. 2016, 8(13), 14-16.
- 2) 川島みどり. 看護の「基礎」って何だろう? ゆるがない「基礎」をつくるために. 看護教育. 2013, 54(1), 6-11.
- 3) 水澤晴代. 基礎看護学担当教員が「本当」にやらなければならないこと 看護技術教育の重視を!. 看護教育. 2013, 54(1), 90-94.
- 4) 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子. 看護教育における授業設計. 第4版. 医学書院, 2009, 193p.